

# 南朝における婚姻関係

矢野主税

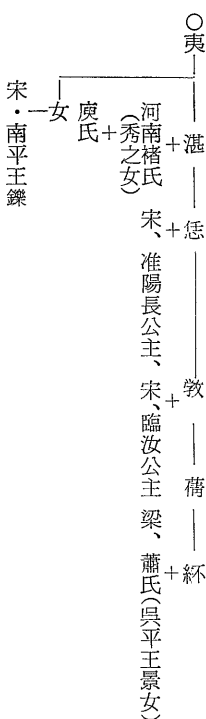
## 目次

序	
第一節	南朝諸王室と門閥との婚姻関係
第二節	晋朝と南朝の婚姻形態の相違
第三節	通婚圏の拡大について
結び	

## 序

私はこの小論において、南朝時代における婚姻関係について考え、それを通して門閥社会の一面を明らかにすることを試みてみたい。先ず、論を進める為の一つの手掛りとして、南朝における名門、済陽江氏の婚姻関係をふり返ってみよう。

### ○済陽江氏略系図



この婚姻略系図についてみるに、王室との密接な関係が特徴的である。ただ、湛の妻は初め河南の褚氏、後に庾氏であった。庾氏の出身は明らかでないが、他が晋以来の名門褚氏であるからには、潁川の庾氏と見て間違いないであろう。これらの婚姻は恐らく東晋末

或は宋初に行われた。名門間の婚姻といつてよいであろう。その後は王室との婚姻がつづいているが、それは名門江氏と王室との婚姻、と考えてよいであろう。ところが江氏に関して、次のような記録がある。

○司空檀道濟為子求娶(江)湛妹。不許。義康有命。又不從。時人重其立志。義康之盛。人競求自昵。唯湛自疎。固求外出。」

(南史36江夷伝)

○僕射徐勉權重。唯(江)蒨及王規与抗礼。不為之屈。勉因蒨門客翟景為子繇求昏於蒨女。不答。景再言之。仍杖景四十。由此与蒨忤。勉又為子求蒨弟葦及王泰女。二人並拒之。(南史36江夷伝)

と。即ち、檀氏、徐氏は時の權勢家であったとはいえ、婚姻を結ぶには家柄が低い、と考えられたのであろうか。

このようにみえてくると、門閥社会における婚姻は、一般的には似た家族の家の間で行われたであろう。ただ、王室は自分達よりも家格の高い家とも婚姻関係を結んだ如くである。江氏のような一流貴族も亦、王室との婚姻を歓迎したのであろう。

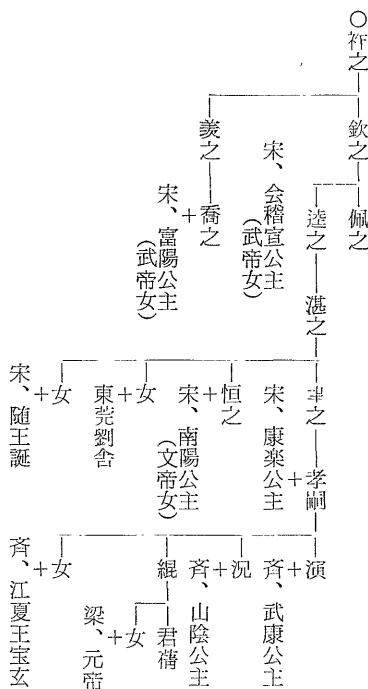
では、相似た家格の家の間で婚姻を結ぶ、という一般原則を以て律し切れない、王室との婚姻関係は、どのような意味をもつものとして理解すべきであろか。いまここでは、まず南朝各王室における婚姻関係について考え、ついで、南朝門閥の婚姻関係において、その晋代に比しての変化をみ、そこから、門閥社会の内部における変化について考えてみたい。

## 第一節 南朝諸王室と門との婚姻関係

私は嘗て、南朝諸王室の婚姻関係が、政權獲得前と、政權獲得後においては異っていること、即ち、政權獲得前は王室諸家の属した地方土豪的家柄間の婚姻であり、王朝成立後は中央有力門閥との婚姻であったことを指摘した（拙稿「魏書南朝の中正制と門閥社会」〔門閥社会史所収〕第二章第二節）。ということは、各王室の婚姻関係は、王朝の成立と共に変化したのであり、そのことは、初め武人政權として成立した各王室が、次第に門閥の中に入りこんでゆく様子を示すものと考えておいた。

前述江氏と王室との関係をみれば、正にそのようであつたらしい。ところが、必ずしもそういった切れぬ史料もある。いま、東海徐氏についてみよう。

### ○東海徐氏略系図



これによれば、この東海徐氏主流派が時の王室と密接に結んでいること明らかである。このことは、この一門が常に國家權力に附随

して榮えてきたことを示している。しかし達之と会稽宣公主との婚姻はなお東晋時代に行われているのであつて（宋書43、徐羨之伝）、初めは、東晋末の權勢家としての劉裕一家と、その腹心の徐氏との婚姻にすぎなかつたわけであらう。然るに、その權勢家は王室に升り、腹心は中央高官となるに及んで、王室と高級官僚家との婚姻という形をとるに至つた、と考えられ、しかもこの家が宋から齊にかけて次々と有力官僚を出したことは、自らこの家の中央官僚家としての伝統を確立することとなり、その社会的地位をも向上せしめたことであらう。

それにもかかわらず、この略系図には、これほど王室の婚姻がみられるのに反して、当時の一流貴族たる王、謝或はそれに準ずる如き家々との婚姻がみられない、という点が注目されるであらう。ということは、この東海徐氏が一応中央官僚家としての地位も確立し、社会的地位も認められてはいたとしても、やはり当時の上流貴族からは勲門として輕視され、婚姻の相手としては拒絶された、ということではなからうか。ということは、王室の婚姻の相手は必ずしも一流の貴族に限つたわけではなく、勲門ではあるが有力官僚家であるものとの婚姻もあつたわけである。従つて、諸王室の婚姻関係が政權獲得前と後とで大きく変化したという大筋において誤りはないとしても、更にその内容を調査することによって、王室と門閥社会との関係について、以前とは異つた点を指摘できるのではないかと考える。

この場合、問題は政權獲得後の婚姻にあるので、以下政權獲得後の各王室の婚姻関係を示してみよう。次の表は、勿論完全なものとはいひ難いが、大體の傾向を知るにはさしつかえないと考えている（表内の数字は通婚度数を示す。筆者撰「未定稿南北朝百官世系表」（未発表）による。）。

○王室通婚表

氏名	宋室	齊室	梁室	陳室
下邳趙氏	1			
東海徐氏	4	3	1	2
琅邪王氏	15	12	5	
太原王氏	1			1
蘭陵蕭氏	4			
東莞藏氏	2		2	
陳郡謝氏	6	1	2	
陳郡袁氏	1		1	
陳郡殷氏	3		3	1
濟陽蔡氏	1			
河南褚氏	9	1		
廬江何氏	5	2		
汝南周氏	3			
濟陽江氏	4	2	1	
平昌孟氏	3			
丹陽路氏	1			
彭城劉氏		3		
高平檀氏		1	1	
(?)王氏	2	1	1	
高平祁氏		1		2
河東柳氏		1		
范陽張氏			3	
陳留阮氏			1	
巴西侯氏				1
彭城到氏				1

南朝における婚姻關係(矢野)

計	吳郡張氏	吳興沈氏	吳興錢氏	東陽留氏
65				
30				
22				
12	1	1	1	1

この表で注目されることは、第一に、宋朝では琅邪王氏、陳郡謝氏、河南褚氏をはじめ、廬江何氏、濟陽江氏、東海徐氏、蘭陵蕭氏に集中していることであろう。中でも琅邪王氏は圧倒的である。更に、前五者は所謂一流門閥であり、後二者は、王室劉氏と共に宋代に入って中央官僚家となった勳門に属することが注目されよう。齊になるとその傾向は原則的には同様であるが、可なり異ってくる。琅邪王氏が多いことに変わりはないが、他の名門は格別目立ったものはなくなる。彭城の劉氏とか、河東柳氏の如き新興勳門の見えることは宋代と同様である。梁代になると、琅邪王氏もそれほどはなくなり、他の名門とほぼ同列にならぶ。

以上三代では、琅邪王氏を中心にした各名門との婚姻が圧倒的ではあるが、その間に勳門との婚姻が全代を通じてまじり、且つ割合としてはふえる傾向にあるように思われる。

ところがこの傾向は、陳代になるとかなり異ってくる。即ち陳代では、従前にみられた名門との婚姻は稀となり、反って勳門或は寒門との婚が多くなってくる、ということである。これと表裏する如く、宋、齊、梁と続いて王室と婚した家が、多くは陳朝では絶えていることが指摘できる。

第二には、宋朝と陳朝では、その王室とだけしか婚していない家が多いことが注目される。宋朝の下邳趙氏、蘭陵蕭氏、東莞藏氏、平昌孟氏、丹陽路氏の如き、陳朝の巴西侯氏、彭城到氏、吳郡張

氏、呉興沈氏、呉興錢氏、東陽留氏の如きである。これらの家が多くは勲門乃至は寒門であることも注目すべきであるが、更に陳朝では江南出身が多いということも注目すべきであろう。即ち、張、沈、錢、留の各氏がそれである。

以上の事から概括的に考えてみれば、宋から梁までは、王室の婚姻相手は江北出身の名族であつて、それらは當時の上流階層であつたが、陳朝となると、勲門、寒門との婚姻、中でも江南出身との婚が多い傾向が生じてきた。ということは、宋、齊、梁各王朝が、西晋、東晋以来の、江北系の一流門閥中心主義を原則的には引きついだのに対し、陳朝には、それと異質的な社会体制が起りつつあつたのではないか、との疑問を提出することになる。勿論私は、この疑問をここで全面的に解明できるなどと考えているわけではなく、単に婚姻關係をたどることによって、多少なりとこの問題にふれうることを願っているにすぎない。

さて、陳代になつて勲門、寒門と王室の婚が圧倒的に多くなつたのは事実であるが、それ以前にもなかつたわけではない。すると陳代のこの特徴は、急激にやつてきたものではなく、宋朝以降徐々にその傾向を増してきたのではなからうか。齊朝から、琅邪王氏以外、特に目立つた王室との通婚家がなくなり、梁朝では、その琅邪王氏さえも少なくなつてきたことも、そのような変化と相応するものではないのか、という考えが浮んでこよう。そこで私は、西晋、東晋時代の王室司馬氏との通婚家を調査し、そのような勲門或は寒門との通婚は、西晋、東晋以来のものか、それとも宋朝以降のものかを、先ず明らかにしておきたい。

そこで司馬氏の婚姻相手についてみるに、大体次の如くである（拙撰、「改訂魏晉百官世系表」参照）。

太原王氏	6	廬江何氏	1	京兆杜氏	1
琅邪王氏	8	潁川荀氏	2	濟陽虞氏	1
潁川庾氏	3	河南褚氏	1	泰山羊氏	2
河東賈氏	2	弘農王氏	1	沛國劉氏	1
弘農楊氏	2	太原溫氏	1	東萊劉氏	1
東海王氏	1	平原華氏	1	中山劉氏	1
沛國夏侯氏	1	南陽樂氏	1	范陽廬氏	1
河内張氏	1	譙國桓氏	2	河東裴氏	3
河東衛氏	2	陳郡謝氏	2	琅邪孫氏	1
東萊王氏	1	東海繆氏	1	河内楊氏	1

司馬氏はいうまでもなく河内郡出身の豪族であり、曹魏政權育王芳の時代から政治の実權を握つていたことは周知の如くである。従つて、その婚姻關係をみても、一、二の特殊例を除いて、殆ど魏晋代の名門、或は中央官僚家との通婚であつた。では、特殊例とはどのようなものかというに、司馬氏の魏政權参加以前の宣帝と河内張氏、東晋時代の河東公主と琅邪孫会（晋書59趙王倫伝）との婚の如きである。河内の張氏は、父は魏の粟邑令汪であり、母は河内山氏であつた（晋書13、宣穆張皇后伝）。従つて、この後漢時代になされたと思われる宣帝と張氏との婚は、河内郡の豪族間の婚姻であつたと考えられる。これと同様な例は、宣帝の弟の子たる高密文獻王泰が、河内郡の豪族であり、魏の有力官僚となつた楊俊の女と婚した如きに見える（魏志23楊俊伝）。宣帝と楊俊とは仲の良い友人であつたという（同上）。

次の琅邪孫会は、孫秀の子である。秀は、「秀起自琅邪外史。累官於趙國。以諂媚自達。」（晋書59趙王倫伝）とある如く、趙王倫に仕えて權勢をふるつたが、勿論、王側近の小吏にすぎなかつた。けれども趙王倫の勢力を背景として、惠帝の女河東公主と己の子とを婚せ

しめるに至った。このことが一般に知れるや、「百姓忽聞其尚主。莫不駭愕。」(同上)と伝えられているほど異常なものであった。従って、王室司馬氏の婚姻関係を考える場合、これらの特殊例を考慮に入れる必要はない、といえよう。

勿論、西晋時代になって急速に中央官僚化してきた家と司馬氏との婚姻がなかったわけではない。例えば、南陽樂氏と成都王穎との婚の如きはそうであろう。晋書(43)樂広伝によれば、広の父方は魏征西將軍夏侯玄の参軍にすぎず、その死後は、「広孤貧。僑居山陽。寒素為業。人無知者。」(晋書43樂広伝)といわれていたが、広はその人物の故に裴楷、王戎、賈充等の如き当時の名門、權勢家に知られ、彼等の援引によって遂に中央高官となるに至った。而もなお当時は門閥社会の成立期にあたり、婚姻に際してそれほど家格を問わず、人物本位の考え方が残っていたことは、既に守屋氏の指摘されたところである(守屋美都雄氏「六朝門閥の一研究」参照)。従って、このような例は、当時の社会通念の上では決して例外的なものとして考える必要はないわけである。

しかし、樂氏と司馬氏との婚の如き例は極めて稀で、大体は当時の名門、少くとも魏以来の中央官僚家が司馬氏の婚姻相手であり、司馬氏と共に門閥社会を形成していった家々であった。このことは、司馬氏が当時の門閥社会の中にとけこんでいた、即ち、司馬氏は一面政權を握りながらも、他面門閥そのものであったことを示すものであろう。

このことを、南朝の場合と考え合せてみれば、南朝諸王朝は地方士大夫の家から身を起して政權を握った軍閥政權であって、司馬政權が門閥社会と共に成長発展した如きとは異っているわけである。即ち、司馬政權にとって門閥社会は、自らを中心として長い年月かけて発展してきた社会であり、両者は一体的なものであった。とこ

ろが、南朝の場合は、既に存在している門閥社会に、外から、而も社会的には輕視されていた地位から入り込もうとしたわけである。従って、政治的には、宋書(42)王弘伝に、「高祖因宴集謂羣公曰。我布衣始望不至此。……弘率爾對曰。此所謂天命。求之不可得。推之不可去。」というところに見える如く、天命を得て君臨する特殊の地位として、容易に承服された天子の地位ではあったが、一方社会的には、宋書(1)武帝紀に、「且桓玄雖以雄豪見推。而一朝便有極位。晋氏四方牧守及在朝大臣。尽心伏事。臣主之分定矣。高祖位微於朝。衆無一旅。奮臂草萊之中。倡大義以復皇祚。由是、王謐等諸人時衆民望。莫不愧而憚焉。」というところに明らかたであらう。

従って、これら諸王朝が、政治的のみならず、社会的にも支配的地位を固めてゆく為には、すみやかに自らを門閥化する必要があったと考えられる。その為の最も簡単な手段が、一流門閥との通婚であったに違いない。そう考えると、当時最高の門閥であった琅邪王氏との通婚が、圧倒的に多いことも了解できるであろう。而もこれら王室の周辺には、政權獲得にあたって労苦を共にした所謂股肱の臣がいた。彼等は勿論単なる武人或は寒門出身にすぎなかったが政權獲得、王朝成立と共に必然的に中央高官となり、政權をめぐる中央官僚家を形成した。その故に、これら各王朝の通婚には、おのづから勲門或は寒門との婚が入り込んでくるわけである。

このように考えてくれば、勲門或は寒門との通婚は、宋朝以降のことと考えてよく、それは武力をもって政權を握ったこれら諸政權が、始めから負わざるを得なかった運命であったとも考えられよう。では次に、宋朝以降の、勲門、寒門と王室との通婚を調査することによって、陳代において、何故にあのような、極端な通婚関係

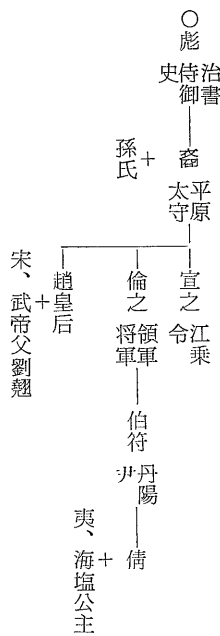
があらわれてきたのか、ということについて考えることとする。

上述の王室通婚表において、宋代で勲門、寒門とみられるものは、東海徐氏、蘭陵蕭氏、東莞藏氏、下邳趙氏、丹陽路氏の如きであるが、齊では高平檀氏、河東柳氏、梁代では范陽張氏の如きである。陳代となるや、巴西侯氏、吳興沈氏、吳興錢氏、東陽留氏、彭城劉氏の如きが見え、特に侯氏、劉氏を除いたものは、江南出身であった点も注目される。

ではこれらの家々と各王朝とは、どのような結びつきをし、それは何を意味するものであろうか、ということになるが、先づ、これらの家々と政権との関係を調べてみよう。

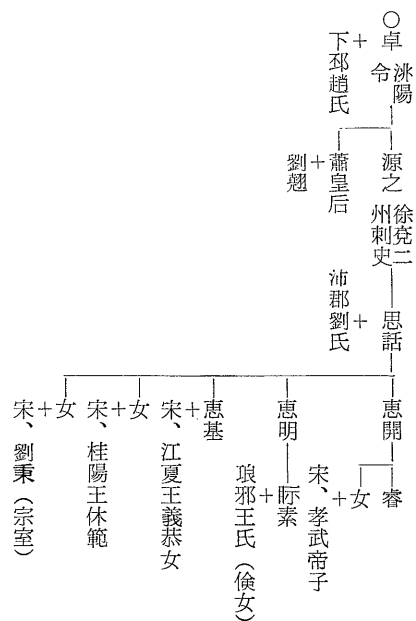
### ○宋朝關係

#### 一、下邳趙氏略系図



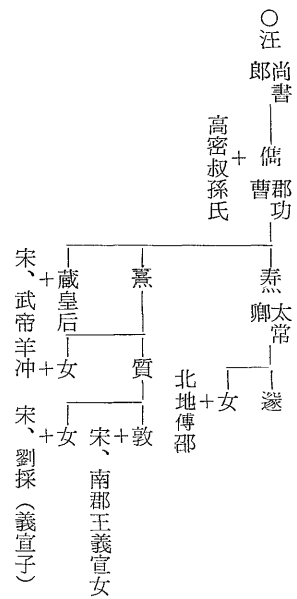
さて、嘗て述べた如く（「魏晉南朝の中正制と門閥社会」所収）、この趙氏は地方の平凡な官僚家にすぎなかった。たまたま劉氏と相似た家柄ということで、武帝の父劉翹と趙皇后との婚姻が成立したと考えられる。勿論これは、宋朝成立以前のことである。倫之は皇后の弟であるが、早くから武帝に仕えて軍功あり、佐命の功を認められて、政權樹立と共に中央官僚家を形成したと見られる（宋書46趙倫之伝）。倫之の孫倩も宋の公主と婚している。

#### 二、蘭陵蕭氏略系図



この家についても別にふれた如く（前掲「魏晉南朝の中正制と門閥社会」）、地方の平凡な官僚家であったにちがいない。それが、源之の姉が王朝成立前に宋武帝の父劉翹と婚し、劉裕が政權を握るに及んで中央官僚家として成立したこと、下邳趙氏と同様である。ただ両氏の相違は、趙氏が中央官僚としてそれほど栄えなかったのに対し、蕭氏は思話の活動によって、中央官僚家としての地位を確立したのみならず、遂に甲門としての社会的地位をも得てきたことは、蕭素と王儉の女との婚が行われたことによって察せられる。しかし、後の宋の王室との多くの婚姻は、孝懿蕭皇后による外戚というつながりの上に、蕭氏が王室の成立と一緒に、中央官僚化していったということによるものであろうから、それらの婚姻が王室と甲門の婚姻であったとは考え難いので、それらはやはり勲門としての蕭氏と王室との通婚とみておくべきであろう。

#### 三、東莞藏氏略系図



この家も平凡な地方の士大夫家にすぎなかったことは、殆ど間違いないだろう。その祖先が、汪までしか明らかにできないことも、それらが大了官職についていないことも、儁の妻が高密の叔孫氏という中央政界に全く縁のない家であったことなども、皆その証拠であろう。藏氏と劉裕との婚姻は政權樹立前の東晋時代であるから、この婚も趙氏、蕭氏の場合と同じく、地方士大夫家相互の婚姻であったと考えてよいであろう。藏氏が中央官僚となったのは、この通婚の故であると思われ、宋政權樹立と共に、一緒に成長した中央官僚家の一つと見てさしつかえあるまい。従って、南郡王家と藏氏の婚姻も、宗室と勳門の婚姻と考えてさしつかえあるまい。

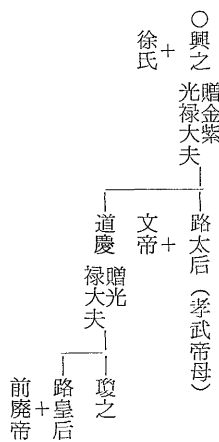
#### 四、東海徐氏略系図（省略、前出）

この家については一応説明を加えておいたが、必要な限りにおいて再説すると、この家は東晋末に中央官界に顔を出したにすぎず（晋書74桓彝伝附徐寧伝）、後に羨之が、「吾位至二品、官為二千石。志願久充（宋書43徐羨之伝）。」といったところをみれば、さしたる家柄であったとは考えられない。この家が中央官僚家として確立したのは、欽之、羨之兄弟に至ってからである。それには、東晋末に行われた達之と宋武帝長女、会稽公主との婚姻が大いに影響したと考えねばならず、この家も亦前記諸家と同様、劉政權成立と共に

南朝における婚姻関係（矢野）

に中央に乗り出した家とみることができる。しかし徐羨之は、東晋末以来武帝の股肱の臣であり、佐命の功臣であり、宋初の有力政治家の一人でもあった。このような政權成立前からその後にかけての關係によつて、その後の両者間の婚姻が行われたものと見られるであろう。

#### 五、丹陽路氏略系図



宋書（41）文帝路淑媛伝によれば、「廢帝景和中。以休之為黃門侍郎、茂之左軍將軍。……道慶女為皇后。」とみえているから、道慶の女は一時的にもせよ、前廢帝の皇后として立てられていたこと間違いないまい。この家が社会的には全くの単家にすぎなかったであろうことは、宋書路淑媛伝に、「（太后弟子）瓊之宅与太常王僧達並門。嘗盛車服衛從。造僧達。僧達不為之礼。瓊之以訴太后。太后大怒。告上曰。我尚在而人皆陵我家。死後乞食矣。欲舉僧達。上曰。瓊之年少。自不宜輕造詣。王僧達貴公子。豈以此事加舉。」とみえるところでも察せられるであろう。道慶の女が前廢帝の皇后として立てられたのも、孝武帝の母としての路太後の意から出たものであろうし、王室との婚といつても、これは一応例外的なものとして考えてもよさそうである。

以上五氏の中、路氏を例外として他の四氏についてみるに、特徴的なことは、これらの家々は劉氏がなお政權を獲得する以前、名もなき地方士大夫にすぎなかった頃に婚姻したことがある、というこ

とであろう。婚姻というものは、元来、魏志（5）文德郭皇后伝に  
 いう如く、同郷であつて門戸の相似た間柄においてなされるのが普  
 通であつたとすれば、時代こそ降れ、上述四家と劉氏との婚は、同  
 郷でもあり、且つ相似た家柄相互の、世間一般にみられる婚姻であ  
 つたと考えてよいであろう。

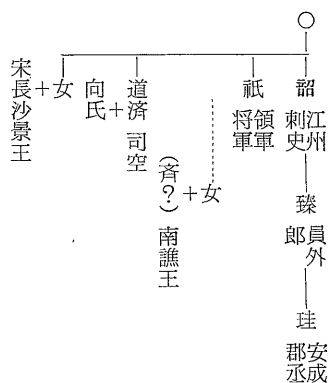
しかし、勿論それのみではなかつたようである。というのは、こ  
 れら四氏の宋初の人物は、それぞれ宋朝成立に功績があつた人々、  
 換言すれば、劉裕の股肱として建国に活動した人々であり、従つ  
 て、その功績の故に王室と密接な君臣關係を結び、劉氏政權の成長  
 と共に成長し、劉宋政權の確立によつて中央官僚家としての地位を  
 得た人々であつた。即ち、彼等は一面劉氏の政權獲得以前から外戚  
 として親しい關係にあると共に、他面その建国に功勞あり、その結  
 果として中央官僚家となるに至つたわけで、そのような關係が政權  
 樹立後に、再び彼等と王室とを通婚せしめるに至つたものと考えら  
 れる。従つて、これら四氏は皆所謂勳門といふべきで、例えば宋書  
 （46）趙倫之伝に、「光祿大夫范泰好戲。謂曰。司徒公缺。必用汝老  
 奴。我言汝資地。所任要是外戚。高秩次第所至耳。倫之大喜。每  
 載酒肴詣泰。」とある如く、上流門閥の人々からは輕視されること  
 があつたわけであり、その限りにおいて所謂甲門とはいひ難い。し  
 かし、彼等が宋初に中央官僚家としてのし上つたことは明らかであ  
 つて、その子孫ともなれば、一応の社会的尊敬は得ていたと思われ  
 るし、一例えば宋書（78）蕭思話伝によれば、「思話宗戚令望。蚤  
 見任待。……所至無讎讎清節。亦無穢黷之累。愛才好士。人多婦之。  
 」とみえる。一そのような事なしには王室との通婚は成立し難かつ  
 たであろう。即ち、これらの家々の門閥内における地位は、王、謝  
 は勿論、何、褚、殷、袁等の有力諸氏よりも一段ひくいものではあ  
 つたとしても、官達を背景として、一応中央門閥の仲間入りはして

いたわけであろう。

では次に齊朝においてはどうかであつたらうか。

### ○齊朝關係

#### 一、高平檀氏略系図



この表の中、南譙王につい  
 ては明らかでないが、恐ら  
 く齊の宗室であろう。若し  
 そうでなくて宋の宗室であ  
 ったとしてもこの論文の論  
 旨に変更はないので、一応  
 齊宗室と考えておく。

さて、南齊書（33）王僧

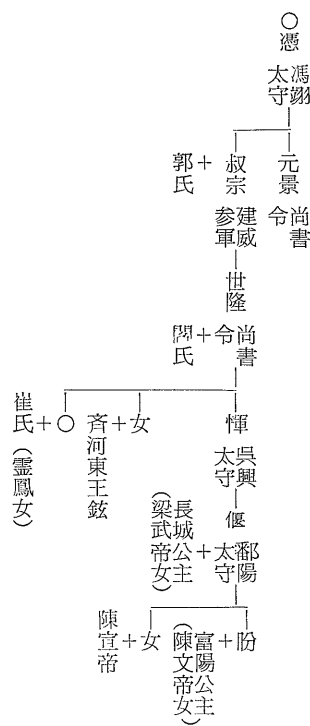
虔伝によれば、檀氏について、面白い話が伝わっている。即ち、  
 「高平檀桂……与（王）僧虔書曰。……身雖孤微。百世国士。姻婭  
 位官。亦不後物。尚書同堂姉為江夏王妃。檀桂同堂姑為南譙王妃。  
 尚書婦是江夏王妃。檀桂祖姑嬢長沙景王。尚書伯為江州。檀桂亦為  
 江州。尚書從兄出身為後軍參軍。檀桂父積褐亦為中軍參軍。僕於尚  
 書。人地本懸。至於婚宦。不至殊絶。」と。

桂の祖詔は、その弟祗、道濟と共に宋の高祖建国の時、武勲を以  
 て寵せられたこと、宋書（45）檀詔伝に、「高祖受命。以佐命功増八  
 百戸。并前千五百戸。詔嗜酒貪横。所莅無績。上嘉其合門從義。弟  
 道濟又有大功。故特見寵授。」とみえる始くである。この一門は元  
 来は名もなき武将の家にすぎなかつたとみえる。従つて、宋王室と  
 の婚があつたとしても、それは劉宋政權樹立前のことで、その頃相  
 似た武人の家劉氏との婚があつたにすぎぬ。従つて、それで以て王  
 僧虔の妻が江夏王の女であるという、劉宋政權成立後の婚姻と比較



するのは当たらないであろう。しかし、詔兄弟三人の佐命の功によりこの一門が中央官僚となったことは明らかであり、南譙王との通婚はその結果行われたものと考えられる。従って、多少的はずれながら、「於婚宦不殊絶」と一応は主張したのであるが、やはり「人地本懸」とて、門閥社会における檀氏の地位の低さを自認せざるを得なかったのである。

## 二、河東柳氏略系図



この家は元來河東の著姓であったが、南朝柳元景に至って中央官僚となった。元景は武將として活動し、宋孝武帝に重用せられ、尚書令に至った。宋書(77)の彼の伝には、「元景起自將帥。及當朝理務。雖非所長而有弘雅之美。」と伝えている。世隆も亦武人であり、南齊太祖及び世祖と親しく、早くからその股肱として建国佐命の功があった(南齊書24柳世隆伝)。齊朝成立後は政治的にも重用され、世祖永明七年尚書令となったが、學問に對する関心もあり、「世隆性愛涉獵。啓太祖借秘閣書。上給二千卷。」とか、「世隆少立功名。晚專以談義。」(南齊書柳世隆伝)とかいう如く、晩年には教養をつむことに努めた如くである。このようにして中央官僚家の確立をみたものの、しかし齊代に甲門とみられた形迹はなく河東王

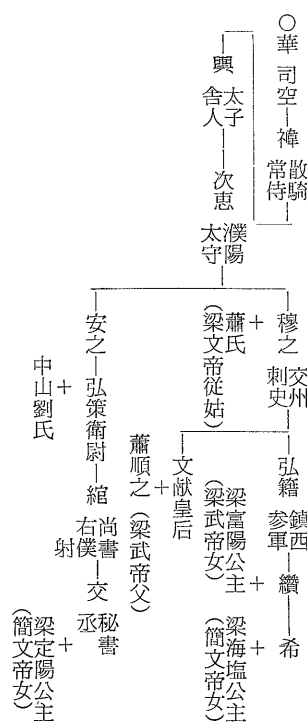
南朝における婚姻關係(矢野)

鉉にその女を嫁したのは、南史(43)河東王鉉伝に、「高帝臨崩以屬武帝。武帝甚加意焉。為納柳世隆女為妃。」とあるように、世祖武帝の意によったものであるが、これは恐らく建国前から辛苦をともした、帝と世隆との親しさの故であったと見るべきであろう。

次に梁王室關係についてみよう。

## ○梁朝關係

## ○范陽張氏略系図



この家は、西晋の有力官僚張華の子孫である。渡江後は顯れることなく、門閥社会の平凡な一員にすぎなかったようである。ところが、この家は梁武帝の家と親しい間柄にあったらしく、穆之は恐らく東晋末か宋初の頃に、武帝の父文帝の從姑と婚している(梁書7太祖張皇后伝)。更に穆之の子文獻皇后が宋元嘉中に、文帝即ち蕭順之と婚を結んでいる(同上)。これらは、この両者がごく親しい生活グループの中にあつたことを示すものようである。それは張弘策伝(梁書11)にみえる、次の如き記事からも推察されるところである。即ち、「弘策与高祖年相輩。幼見親狎恒随高祖遊處。每入室。常覺有雲煙氣。体輒肅然。弘策由此特敬高祖。」と。このよに、幼少の頃から親しい關係にあつた張弘策は、長じては梁武帝の

股肱として建国佐命の功あり（梁書11張弘策伝）、その一門は優遇されて中央官僚となり、續は武帝の従兄弟の間柄として寵を蒙り（梁書34張續伝）、張氏は梁朝における、最も権勢ある家の一つとなった。けれどもなおその社会的地位については、一流門閥としての評価をうけ難かったことは、南史（56）張弘策伝續の条に、「五年武帝詔曰。續外氏英華。朝中領袖。司空已後。名冠范陽。可尚書僕射。續本寒門。以外戚顯重。高自擬倫。而詔有司空范陽之言。深用為狹。以朱异草詔。与异不平。」とみえるところによるに、一応續の時には甲門として遇されたにもかかわらず、草詔者朱异の見るところでは、なお天下の張氏ではなかったわけであろう。而もその朱异も、君側の権臣であり、且は呉郡の名族朱氏に属していたかも知れぬが、当時は寒士層に属していたに過ぎぬ者であった（越智重明氏「梁の天監改革と次門層」（史学研究97号））。

以上、齊、梁時代の檀氏、柳氏、張氏についてみるに、共に勲門であり且つ建国佐命の功臣の家であり、王朝の成長と共に成長し、王朝成立と共に中央官僚家にのし上ったものであることと宋代にみた前述四氏と変るところはない。従って、これらの家と王室との婚姻は、政權樹立以前からの王室との親密の故であったと考えられる。

ところが陳代になると、必ずしもそうではなかった如くである。

### ○陳朝關係

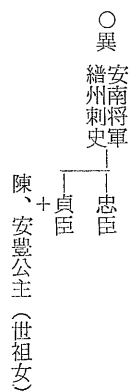
#### 一、巴西侯氏略系図



この家は西蜀侯豪（南史66侯瑱伝）といわれている如く、巴西の豪

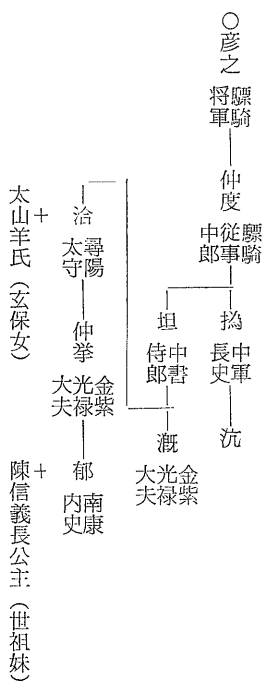
族であったのであろう。瑱は梁末の争乱に、王僧弁輩下の武將として梁元帝に仕え、陳高祖が王僧弁を誅するに及んで一時高祖と対立したが、ついに降り、世祖即位に及んで大尉に進んだ。彼は陳の良將（陳書8侯安都伝）であり、高祖末から世祖にかけての軍事面の中心人物であった（同上）。その子淨藏と世祖の女との婚は、そのような者兩の結びきつによったものであろうか。

#### 二、東陽留氏略系図



この家は、「世為郡著姓」（陳書35留異伝）とあるが、その祖先については何等知られていない。この東陽の豪族であったのであろう。その陳室との婚姻について、陳書（35）の史臣評には「（陳）宝応及（留）異。世祖或敦以婚姻。或処其類族。豈有不能威制。蓋以德懷也。」と述べて、留異をなづくるに婚姻を以てしたのだという。一種の政略結婚であったのであろう。巴西侯氏の場合も、或はそのようなものであったのかも知れない。

#### 三、彭城劉氏略系図



彭城の到氏は彦之が東晋末から宋武帝に随つて戦功あり、武人として高官に至つた（南史25到彦之伝）。その後、この一門は中央官僚として貴族的教養を身につけてきたこと、例えば沆について、「及長善属文。工篆隸。美風神容止可悦。」（南史25到彦之伝沆の条）とか、概について、「白皙美鬚。举动風華。善於応答。」（同上沆の条）とかいわれている如くであつた。けれども尚一流貴族からは軽んぜられていたことは、「（概）掌吏部尚書。時何敬容以令参掌選事。有不允。概輒相執。敬容謂人曰。到概尚有余臭。遂学為貴人。」（同上）という記事によつて伺われる。沆の妻は羊玄保の女であつたが、その婚について、「父坦以沆無外家。乃娶於羊玄保。以為外氏。」（同上沆の条）とある如く、太山羊玄保を外氏として求めたことは、当時の羊氏が必ずしも一流門閥ではなかつただけに、そのくらしいところが到氏の社会的地位であつたと推定されよう。従つて、仲拳の子郁が世祖の妹に尚したのは、梁の時代、仲拳が世祖の郷里長城の令であつた時のこととして、「陳文帝居郷里。嘗謂仲拳。時天陰雨。……而文帝至。仲拳異之。乃深自結。」（南史25到彦之伝仲拳の条）と伝える如き、早くからの両名の結びつきの故で、必ずしも到氏が一流貴族として考えられていたが故、という如きではなかつたであらう。

ところが陳王室の外戚には、以上のような宋、齊などの王室に多くみられた勲門外戚の如きの外に、従来あまりみられなかつた郷里の豪門があつた。呉興沈氏、呉興錢氏の如きである。

#### 四、呉興錢氏略系図

○錢仲方——女

陳、武帝（政權成立前）

○錢景深——道戢  
漢壽令——鄆州刺史

陳氏（武帝從妹）——  
（政權成立前）

南朝における婚姻關係（矢野）

○錢藏——留  
陳留太守——留

永世公主（武帝女）  
梁代

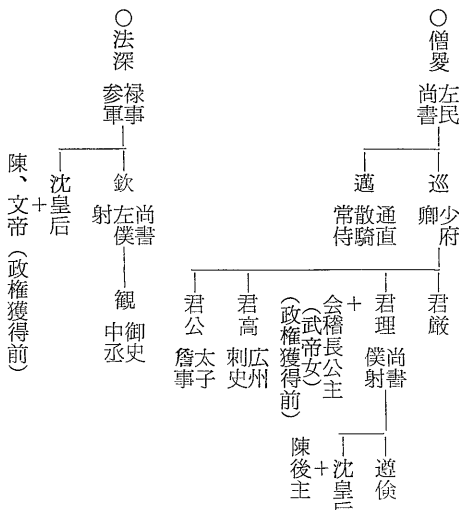
○錢肅——  
陳、義興公主

さて、陳の王室は、呉興長城下若里人といわれている（陳書1高祖紀）。其先は潁川陳氏というが、勿論そのままは信じ難い。しかし、「咸和中土斷。故為長城人。」（同上）とあるから、東晋の初めから呉興長城に住みついていたのであらう。勿論陳氏が郷里の名門でなかつたことは、陳書（16）蔡景歷伝に、「衡陽獻王時為呉興郡。居年尚少。呉興王之郷里。父老故人。尊卑有数。高祖恐昌年少、接対乖礼。乃遣景歷輔之。」とみえている如く、高祖の第六子衡陽王昌が高祖の郷里の長官となり、郷里の父老故人に対して礼を失することがないよう配慮したということは、なおこれが梁末であつて、出身郡の人心収攬が大事であつたということもあるが、決して陳氏が呉興の名門ではなかつたことを思わしめる。

このことは、政權掌握前の婚姻相手によつても推測できる。武帝の母は董氏、武帝の妻は錢氏及章氏であつた。董氏については明らかでないが、錢氏については、「高祖先娶同郡錢仲方女。」（陳書7高祖章皇后伝）とみえている。この呉興錢氏については、他にも高祖の女永世公主が、梁代に陳留太守錢藏に嫁しており（陳書17袁敬伝）、高祖の從妹が、高祖がなお微なる時、漢寿令錢景琛の子道戢に嫁している（陳書22錢道戢伝）。これらによれば、董氏、錢氏、陳氏は同郡の相似た地方士大夫の家にすぎなかつたのではなからうか。というのは、錢氏について、次の如き話が伝えられているからである。陳書（34）蔡凝伝によれば、「高祖（宗）常謂凝曰。我欲用義興主婿錢肅為黃門郎。卿意何如。凝正色對曰。帝郷旧戚。恩由聖旨。則無所復問。若格以命議。黃散之職。故須人門兼美。惟陛

下裁之。高宗默然而止。」とみえる。ここに蔡凝という所は、「銭氏は帝と同郷の外戚、帝旨によって命ぜられるならばいざ知らず、人門兼美を用うべき黄散の地に銭肅を用うべきではない」というものであろう。即ち銭氏は社会的には寒門としかみられなかったと考えられる。銭肅と義興公主との婚は、恐らくは陳政権樹立前の、銭氏と陳氏との親戚関係が延長されたものと考えられる。即ち、銭氏も陳氏も、元来は呉興の寒門にすぎなかったであろう。高祖の後の妻章氏については、「呉興烏程人也。本姓鈕。父景明為章氏所養。因改焉。景明梁代、官至散騎侍郎。」(陳書7高祖章皇后伝)とみえ、更に、「后親屬無在朝者。唯族兄鈕洽、官至中散大夫。」(同上)というから、この家も亦銭氏と相似た家柄であったのである。

#### 五、呉興沈氏略系図



呉興沈氏と陳氏との婚姻をみるに、陳王朝成立前に、世祖文帝と

法深の女(陳書7沈皇后)、沈君理と高祖武帝の女(伝陳書23沈君理伝)との婚及び長沙王叔堅妃沈氏(陳書28長沙王伝)があった。陳王朝成立後は、後主と沈皇后(陳書7沈皇后伝)との婚が見える。

沈氏はいうまでもなく呉興の豪門であり、幾多の門流に分れ、多くの中央官僚を出した一族ではあるが、世祖沈皇后はどの門流に属するか、明らかにし難い。皇后伝(陳書7)には、その兄欽について、「為尚書右僕射。尋遷左僕射。欽素無技能。率已而已。」といっているから、皇后の兄の故を以て左僕射の要任に至ったものの、殆ど教養のない単なる武人にすぎなかったらしい。

一方沈君理の場合は、その伝(陳書23)によれば、祖僧爰は梁の左民尚書、父巡素は東陽太守で、父は陳高祖と仲のよい友人であった。而も、「君理美風儀。博涉經史。有識鑒」(同上)とあるから、一応門閥としての教養もあり、その人物を認められての通婚ではあろうが、元来は父と高祖が同郷の友人であるということによるものであろう。

この君理の家と世祖沈皇后の家との関係は明らかにし難いが、両者共に同郷的誼みからの、王室との通婚と思われるが、とすれば、君理の女が後主の皇后となったのも、陳朝成立後のこととはいえ、これらの王朝樹立前の姻戚関係によるものといえそうである。勿論、君理はその人物の故に重用され、遂に太建元年吏部尚書に至り、翌年女が皇太子妃となつていことから考えて(同上)、陳氏勢力と共に成長し、政權樹立と共に中央官僚家となった家と王室との通婚という面もあったわけである。

以上銭氏や沈氏の場合をみれば、前代諸王朝にみえた、中央にのし上つて来た権勢ある勳門と王室との婚、というだけのものとは異つて、同郷としての誼みにもとづいての政權獲得前の婚姻関係が、政權獲得後もつづけられた関係の如くであり、その為寒門と

王室との婚が見えるといえそうである。

さて、以上の調査によって各王朝の婚姻関係を概観すると、宋、齊、梁各王朝においては、従来の一流門閥との婚姻を中心とし、それに加うるに、王朝と共に成長して中央官僚家となった勳門との婚が多かった。陳朝では、一流門閥との通婚がなかったわけでもなく、又王朝と共に成長した中央官僚家との通婚もあったが、それと共に、軍事力ある家との政略結婚、同郷的色彩の強い婚姻が行われている。即ち、寒門、勳門との通婚はすべての王朝で行われているのではあるが、ただ陳朝では他にみられない特徴がある、ということになる。

こう考えてくると、南朝諸王朝は、自らの一族とその股肱の臣の一族とを、共に門閥社会の中にとけ込ませ、積極的に門閥化を心掛けたといえそうである。そのことは、王朝側が門閥の社会的、政治的努力を認めざるを得ず、王室も亦門閥社会の一員であるという、西晋以降の伝統に妥協的であったといえないことはない。もっとも、陳朝においてはそのような伝統が全く否定されたわけではないにしても、形式的な家柄よりも、現実的な勢力関係に目をむけていたといえそうである。

しかし、反面から言えば、以上の王朝の態度は、それ自身門閥化しつづつあったとはいえ、なお勳門、寒門との通婚を認めていたわけで、実際にはそれだけ門閥社会に対して否定的であったので、その傾向が、南方に長く土着し、北方勢力からも追いつめられて苦しい政治状態にあった陳朝では、何等実力のない門閥社会に対して、より一層否定的であったことを示す、ともいえよう。換言すれば、このような各王朝の通婚態度は、嘗て私が論じた門閥社会の動揺（「門閥社会の成立と崩壊」第四章（拙著「門閥社会史」所収））と相応するものといえようか。

さていままでは、南朝王室を中心としての婚姻関係についてみてきたが、次に、晋朝門閥の婚姻形態と、南朝門閥の婚姻形態とを比較することによって、その間にどのような変化がみられ、それは社会の変化とどう関連するか、ということについて考えてみたい。

### 第二節 晋朝と南朝の婚姻形態の相違

先づ晋代の門閥の婚姻関係についてみるに、私は嘗て「裴氏研究」（長崎大学文学部社会科学論叢第十四号）において、西晋時代の裴氏の婚姻関係を論じて、「以上によってみるに、裴氏の婚姻は概ね王室を中心として、琅邪王氏、太原王氏、賈氏、楊氏、衛氏という一流門閥及至は勢門と結ばれている。」と指摘した。これは西晋時代の代表的門閥裴氏を通じてみた結論にすぎないが、いまこの主張を更に確かめる為に、代表的な門閥としての琅邪王氏、陳郡袁氏、陳郡謝氏を例として、西晋、東晋時代の婚姻関係を調べてみよう。

○琅邪王氏の場合（拙撰「改訂魏晉百官世系表」）

司馬氏との婚			陳郡謝氏との婚		
高平郗氏	3		譙国桓氏	3	
琅邪顔氏	2		沛国劉氏	3	
河東裴氏	2		彭城曹氏	1	
南陽樂氏	1		沛国夏侯氏	1	
太原郭氏	1		陳郡袁氏	1	
汝南周氏	1		陳郡殷氏	1	
○陳郡謝氏の場合。（同前）					
司馬氏との婚	2		琅邪王氏との婚	5	
陳郡袁氏	3		陳郡殷氏	1	
河南褚氏	1		潁川庾氏	1	
南陽劉氏	2		太原王氏	1	

琅邪諸葛氏

1

太山羊氏

1

太原郭氏

1

南陽范氏

1

○陳郡袁氏の場合（同前）

陳郡謝氏との婚

3

陳郡殷氏との婚

1

穎川荀氏

1

琅邪王氏

1

以上によつて、先づ第一に考えられることは、袁氏の場合その数が少いとはいえ、婚姻の範圍が極めて限定されているかにみえる。しかし、王氏、謝氏の場合についてみれば、婚姻範圍は必ずしも狭くはなかつたのである。ただ、それにもかかわらず、その相手はやはり名門であるか權門であるかに限られていること明らかで、それら名門、權門の範圍が一つの婚姻グループを形成していたと考えてよいであらう。

第二には、王室司馬氏との婚姻が必ずしもめだっているわけではなく、王室も他の名門と同列にあつた、といえないことはない。しかし、やはり司馬氏は琅邪王氏と共に、これらグループの中の一つの中心であつたことは否めないようである。即ち、王室も晋朝門閥社会に属する一門閥であり、この婚姻グループの中心の一員として考えられていたにすぎぬ、ともいえるようである。

第三には、これら三氏は何れも北方出身、所謂北人であるが、その婚姻相手はすべて北方出身に属するもので、江南出身、所謂南人に属するものは全く見られないことも注目すべきである。

では、これに対して、南朝におけるこれらの家の婚姻について考えてみよう。

○琅邪王氏の場合（前掲「未定稿南朝百官世系表」（未発表））

劉氏（宋室）との婚

15

蕭氏（齊室）との婚

12

蕭氏（梁室）

5

陳氏（陳室）

2

陳郡袁氏

3

陳郡謝氏

3

彭城劉氏

2

廬江何氏

3

陳郡殷氏

1

譙国桓氏

2

魯国孔氏

1

太山羊氏

1

蘭陵蕭氏

1

吳興沈氏

1

（？）韋氏

1

○陳郡謝氏の場合（同上）

劉氏（宋室）との婚

6

蕭氏（齊室）との婚

1

蕭氏（梁室）

2

琅邪王氏

3

陳郡殷氏

1

河南褚氏

1

穎川荀氏

1

陳留阮氏

1

（？）曹氏

1

晋陵王氏

1

南陽張氏

1

○陳郡袁氏の場合（同前）

劉氏（宋室）との婚

1

蕭氏（齊室）との婚

1

蕭氏（梁室）

2

琅邪王氏

3

濟陽蔡氏

3

これら諸氏の婚姻には多くの特徴が見られる。第一には、王室との婚姻が圧倒的に多いこと、第二には全くの寒門との婚が見えること、第三には、これらの諸氏は東晋時代の所謂北人の子孫であるが、同じく所謂南人の子孫との婚が見えることなどがあげられる。

先づ第一の点について晋代と比べてみるに、晋代では王室司馬氏との婚は、他の名門との婚より多少目立つとはいへ、それほど他から際立ってはいなかった。然るに宋朝以降では、王室との婚が急激にふえている。それは三氏の場合に共通の現象である。これは一体何を意味するものだろうか。

先づ考えられるのは、「諸尚公主者。並用世胄。不必皆有才能。」（宋書52、褚叔度伝、湛之の条）とみえ、或は鬱林王何妃について、

「撫軍將軍何戡女也。初將納為南郡王妃。文惠太子嫌戡無男門孤。不与欲昏。王儉以、南郡王妃便為將來外戚。唯須高胃。不須強門。今何氏蔭華族弱。寔允外戚之義。永明三年乃成昏。」（南史10鬱林王何妃伝）とみえるところによつて伺われる如く、公主に尚するものは才能はどうともあれ、家格の高い門閥であるべきであつたし、王室の外戚は有力門閥であるべきである、ということであつた。ということとは、これらの婚姻は王室側からの働きかけによつたことを推察せしめる。即ち、司馬氏とは異つて、門閥社会の外にあつた王室が、より早く自らの社会的地位を高める為の手段として、名門との通婚が必要にであつたことを示すものであらう。

しかし反面、門閥側から婚を求めたことがなかつたわけではない。例えば、南史(44)南康王子琳伝によれば、「子琳以母寵故。最見愛。太尉王儉因請昏。(齊)武帝悅而許之。」とみえている。王儉の如き最も有力な門閥に属し、且は最高の官にあつた人になつておかつ、帝の最も寵愛する王子との昏を望んでいる。これはやはり、王室との婚姻が政治的意味を含んでいたことを示すものである。それは例えば、宋書(71)王僧綽伝に、「僧綽嘗謂中書侍郎蔡興宗曰。弟名位應与新建齊。超至今日。蓋由姻戚所致也。」とある如く、昇進が王室との婚姻—僧綽の妻は宋室の公主—に左右されることがあつたからであらう。

勿論。梁書(7)太宗王皇后伝に、琅邪王鸞の言葉として、「謂諸子曰。吾家門戸。所謂素族。自可随平進。不須苟求也。」という自負にみられる如く、一流名門ともなれば、求めずして高官に至ることも可能だつたわけであり、その故にこそ、南史(24)王裕之伝峻の条に、「子琮為国子生。尚始興王女繁昌主。琮不慧。為学生所嗤。遂離婚。峻謝王。王曰。此自上意。僕極不願如此。峻曰。下官曾祖是謝仁祖外孫。亦不籍殿下姻嬖為門戸耳。」という如く。王室に

反撥する態度もでてくるわけであらう。けれども宋朝以降は、天子の大権は基本的には門閥の官達を制約したことについては越智氏の見解があり(越智氏「南朝における皇帝の中央貴族支配について」(社会経済史学21—5、6合併号)、私も亦吏部権限の変遷に關連して考察したことがある(「魏晉南朝における吏部権變の變遷の一考察」(門閥社会史所収))。従つて、以上のような態度が、誰にでも、何時でも通用するものでなかつたことはいふまでもあるまい。

以上の如く考えてみれば、王室からする積極的態度と共に、反面門閥から王室への接近もあつて、晋代では見られなかつた結婚現象が生まれたものと思われる。それにしても、この王室と名門との婚姻が、宋から齊、梁、陳と時代が降るにつれて減少し、特に陳代には謝氏、袁氏のみならず、江氏、殷氏、徐氏の如きも、全く王室と婚していない点は注目すべきである。このような王室と一流門閥とが、時代が降ると共に次第に疏遠になつてゆく傾向は、どのように考えたらよいのであらうか、その為には、他の二点について考える必要があるやうである。

第二の点、即ち、名門の婚姻相手に、全くの寒門がみられるという点についてみるに、謝氏の相手に晉陵王氏と南陽張氏が見える。

謝眺の妻は晉陵王敬則の女である(南齊書47謝眺伝)。南齊書(26)王敬則伝によれば、その祖先については何等記載なく、敬則の母は女巫であつた。宋末から武人として活動し、齊の太祖に歸してその股肱となり、袁粲の乱に功あり、中領軍、中軍將軍を歴任し、建元十一年司空となり、明帝の世大司馬に進んでいる。彼の伝に、「敬則曰。臣若知書。不過作尚書都令史耳。那得今日。敬則雖不大識書。而性甚警黠。臨州郡。令省事諛辭。下教判決。皆不失理。」とある如く、根っからの武人ではあつたが、仲々のきれ者であつた

らしい。兎に角、この王氏が全くの寒門であつたことは明らかである。その女がどのような理由で謝朓と婚したかは明らかでないが、朓の母は宋文帝の女、長城公主であり、朓の子諶の妻は梁武帝の女、永世公主であることをみれば、彼が全くの寒門の王敬則の女と婚したのは、一見奇異の感なきを得ない。しかし、南史（19）謝朓伝によれば、「朓及殷素与梁武帝以文章相得。帝以大女永興公主適殷子鈞。第二女永世公主適朓子諶。並暫随母向州。及武帝即位。二主始随内還。武帝意薄諶。又以門单欲更適張弘策子。策卒。又以与王志子諱。」とある如く、梁の武帝はこの家を門单としてとり扱ひ、范陽の張弘策及び琅邪王氏の家よりも一段と下にみているのは、謝氏に属するとはいへ、他の門流ほど、この一家が榮えていなかったことを示すものであらう。従つて、王敬則が当時の權門であつたことをみれば、或はこの婚姻はそれほど不自然ではなかつたかも知れぬ。それを明らかにする為に、次の南陽張氏の例をみよう。

謝才卿の妻は南陽張敬兒の女であつた（南史19謝靈運伝超宗の条）。張敬兒は初め武將として宋朝に仕え、早くから齊の太祖と親しみ、齊初には散騎常侍、車騎將軍に至つた（南齊書25張敬兒伝）。彼は一生を武將として過した人物で、「敬兒武將。不習朝儀。」（同上）とか、「敬兒始不識書。晚既為方伯。乃習學。（同上）」などといえる如くであつた。

一方謝才卿は超宗の子である。超宗の祖は靈運で、宋文帝によつて靈運が誅せられてより、謝氏に属するとはいへ、この一家は不遇の中にあつたようである。従つて超宗は、才能があつた割には用いられることなく、その為か、世にすねるところもあつたようである（南史19謝靈運伝超宗の条）。張氏との婚姻の前後の記事に、「世祖即位。使（超宗）掌国史。除竟陵王諮議參軍。領記室。愈不得志。超宗娶張敬兒女為子婦。上甚疑之。永明元年敬兒誅。超宗謂丹陽尹

李安民曰。往年殺韓信。今年殺彭越。尹欲何計。安民具啓之。」（南齊書36謝超宗伝）とみえている。不遇の状態にあつた超宗が、武人として当時世祖の疑うところとなつていた張敬兒と婚を結んだのであるから、世祖がその間に何か反逆の計がないかと疑つたのは当然かも知れぬ。永明元年、匡崇祖につづいて張敬兒が誅され、超宗は、王敬則と共に敬兒を陥れた李安民に、その怨をぶちまけたのであらう。このようにみれば、謝氏に属するにもかかわらず、当時の權勢ある門閥からは寒士と輕んぜられた如き（南史19謝超宗伝）、その不遇の故に、寧ろ寒門であつても、實力をもつ張氏と婚するに如かずと考へての通婚ではなかつたらうか。謝朓の場合もそれに似たものであつたのであらうか。

このような例は、單に謝氏のみではなかつたらしい。例えば前引琅邪王氏と韋氏との婚もそれに近いものではなからうか。これは琅邪王淸と韋氏との婚であるが（南史24王淸之）、何れの韋氏が明らかでない。仮りにこれが梁代の勲門たる京兆韋叡の一門に属したとしても、更に韋叡が梁武帝の股肱の臣であり、叡の子放は完全に中央官僚となつていたとしても、一般的にいって琅邪王氏に比すれば、一段おちる家柄であつたことはいうまでもない。一方王淸も准之の曾孫であるが、この一家も祖父興之以降頭れることなく、父進之も梁武帝の拳兵に應ぜず、琅邪王氏の中では最も不遇の門流であつた。恐らくはこのことが、當時の權門たる韋氏（王淸の妻を京兆韋氏と考へて）との婚を可能としたのであらう。それは宛も謝氏の場合と變りないのであらう。

さて、外にこれらに類した例を、上述諸氏以外から、一つだけ示しておけば、紀僧真の子と荀昭光の女との婚がそうであつたであらう。いま、南史（36）江夷伝敦の条によるに、「先是、中書舍人紀僧真幸於（齊）武帝。稍歷軍校。容表有士風。謂帝曰。臣小人出自



本県武吏。邀逢聖時。階榮至此。為兒昏得荀昭光女。即時無復所須。唯就陛下乞作士大夫。帝曰。由江嶺、謝藩。我不得措此意。可自詣之。僧真承旨詣敬。登榻坐定。敬使命左右曰。移吾牀讓客。僧真喪氣而退。告武帝。曰。士大夫故非天子所命。」とみえるが、これによれば紀僧真是南齊武帝に仕え、士風ある立派な人物であったが、遂に士大夫として認めてもらえなかった。しかし、彼はその人物の故に武帝の最も寵愛する人物であったことは、南齊書(56)紀僧真伝に、「僧真容貌言吐、雅有士風。世祖嘗目送之。笑曰。人何計門戸。紀僧真常貴人所不及。諸權要中。最被盼遇。」とみえる如くであった。ところがその紀僧真が、聖時にあって官階もすすみ、兒の為に荀昭光の女を得たりと満足の意を表している以上、荀昭光は魏晉以来の名門潁川の荀氏に属する者であったに違いない。すると、これも亦名族のある分派に属する家と単家權勢者との婚姻といえるようである。

ところでこの荀昭光は、荀氏の中のどのような門流に属するのか明らかでない。ということは、正史その他の史書にその名を見出せないほど落魄した荀氏の一分支と、寒人とはいえ時の權要として隠然たる勢力をもっていた紀氏との婚姻、ということであろうか。

以上の諸例によって明らかなく、王、謝或はその他の名門に属する者と雖も、それら一門の中で不遇の地にあった傍系門流は、たとえ相手が寒門、寒人であろうと、時の權勢家であれば、それらと婚姻を通ずることは、決して珍らしいことではなかったといえよう。

次に、第三の点、即ち南方出身者と、北方出身門閥との婚がみられることについてみよう。従来の学者の説明によれば、江北出身の一流門閥は、江南出身の名門と雖も、通婚の相手とはしなかった、それは結局は江北出身貴族が、自らの政治的優越を保つ為にとつ

た、自衛手段であったといわれている。その説明の可否は一応別として、南方門閥と北方出身門閥との婚は、なるほど晋代にはみられなかったのであったが、南朝においてもそうであったかというに、私は必ずしもそうではなかったであろう、と思っている。

例えば、既にあげた晋陵の王敬則と謝朓との婚姻もその例で、この場合は、北方出身の名門の中の、あまり栄えていない門流と、南方出身の寒人権門との婚姻であった。更に、前掲表にみる、琅邪王氏と呉興沈氏との婚姻があった。沈慶之の子文季の妻は、王錫の女であったといわれている(南齊書44沈文季伝)。王錫は王弘の子で、「少以宰相子為員外散騎。歷清職。」(宋書42王弘伝)といわれる如く、名門にして且つ宋朝建国の功臣の子であった。その女が沈慶之の子文季と婚したのは、必ずしもあり得ないことではなかったであろう。いま沈慶之の家についてみるに、彼は呉興沈氏に属するが、これはいうまでもなく江南豪族であり、宋朝以降にはその一族から多くの中央官僚を出している(宋書100自序伝)。慶之は宋初から武人として活動、文帝、孝武帝等に歴任して軍功があったが、「世祖晏駕。慶之与柳元景並受顧命遺詔。若有大軍旅及征討。悉使委慶之。」(宋書77沈慶之伝)とみえる如く、当時の宋朝の支柱と目されていたが、前廢帝によって藥を賜って死するに至った。錫と慶之とは同時代の人物であるから(宋書42王弘伝、宋書77沈慶之伝)、この婚姻はこの両者の合意によって成立したものであるうし、江北系名門と江南系権門との婚姻であったと考えてさしつかえなからう。この婚姻について、文季も王錫の女と共に酒豪であるところから(南齊書44沈文季伝)、この婚姻は尋常のものではなかったとする説もあるが、それは南齊書沈文季伝の記事を一方的に読んだ結果であろう。即ち、沈文季伝には、「出為呉興太守。文季飲酒至五斗。妻王氏、王錫女。飲酒亦至三斗。文季与对飲竟日。而視事不廢。」とみえて

いる。卒然としてよめば、成るほど兩者共に酒豪であつて、一般の婚姻ではなかつたかの如くに見えるが、よくみれば、この記事は、文季が飲酒五斗に至つても、呉興太守として仕事を怠らなかつた、ということに重点がおかれたものであろう。従つて、夫婦共に酒豪であつたことは間違いないとしても、それが異常な婚姻であつたと解すべき証拠とはならないであらう。

この外、彭城劉絵の女と呉郡張嶠の婚姻もある(南史39劉勰伝)。彭城劉絵は勰の子である。勰は宋書(86)のその伝によつて明らかになく、父祖は共に郡守にすぎず、大した家柄でもなかつたらしいが、自らは宋文帝以降武將として活躍し、明帝の崩に及んでは、「太宗臨崩顧命。以守尚書右僕射。中領軍如故。」(宋書86劉勰伝)という如く、顧命を蒙る信任をうけた。その後、この一家は中央官僚家として完全に一流貴族のグループに入つたことは、勰の子絵が著作佐郎に起家し、琅邪の王道琰の女と婚し、更に、「永明末、京邑人士。盛為文章談義。皆湊竟陵王西邸。絵為後進領袖。」(南齊書48劉絵伝)とわれる如く、絵が当時の門閥社交界に一地步を占めていたことを見れば明らかであらう。この王道琰は王弘の孫、僧達の子であり、母は臨川王義慶の女、妻は陳郡謝惠宣の女であり、琅邪王氏の主流派に属する。このような名門の女と劉絵が婚したのは、絵の父勰が当時の権門として勢力があつたことも影響なかつたといえないにしても、絵が既に一流貴族に互していたことをみれば、この劉氏の家格が、既に社会的に高い評価をうけつつあつたが故と考えてよいであらう。以上の如く考えて無理がないとすれば、その劉絵の女と、呉郡出身の張嶠が婚したのは、南・北名門の婚姻と考えてよいであらう。嶠は梁の尚書左僕射稷の子で、江南の名門に属すること、いうまでもあるまい(拙稿「張氏研究稿」(長崎大学文学部社会科学論叢第五号) )。

次に洛陽江氏と呉郡朱异との婚もあつた(梁書43江子一伝)。この江氏は、いうまでもなく北人系名門であり、江統の子孫であつた(同上)。しかし、その直接の祖先が明らかでないところからみるに、これは洛陽江氏の傍系であつて、政治的には不遇の状態にあつたものであろう。一方朱异は呉郡錢塘の人、所謂朱張顧陸といわれた呉郡の名門朱氏に属すると思われる。但し、この家も中央官界にあまり知られることなくして、昇に至つたようである。然るに昇は梁武帝に用いられ、その側近として權勢があり、それは、太清二年八月、侯景が挙兵の理由として、側近の姦朱异を討つを名目とした(梁書38朱异伝)ことによつても察せられる。事実、「昇居權要三十九年。善窺人主意。曲能阿諛。以承上旨。故特被寵任。」(同上)という有様であつた。この婚がどのようにして行われたかは明らかでないにしても、北方出身名族の不遇な一家と、天子側近の南方系權勢者との通婚であつたこと間違いない。

### 第三節 通婚圏の拡大について

以上南朝における名門の婚姻の特徴についてみるに、晋代の名門間の通婚に比して、その範圍が大いに拡大されていることがみられる。即ち、名門に属する家々と寒門、寒人、或は又、北方系名族と南方系名門との婚姻などが見られるようになった。このような拡大された通婚についてみるに、上述した諸例に明らかのように、従来の、門戸相匹敵する者、名門と名門、北方系名族の間、とかいう如き婚姻条件が必ずしも絶対的なものではなくなつて、名族の傍系と寒人、名族と勳門・権門、北方系名門と南方系名族、権門等の間の婚姻が行われ始めていることが注目される。この傾向を端的に表現すれば、現実に政治的、社会的勢力をもっている一家と、伝統的、

社会的地位をもっている一家との、相互利用的結合であった、といえるようである。換言すれば、一方では政権を握る王室との通婚がきわ立っており、更に又、政権に近い人々との通婚が特徴的である、といえるであろう。

では、これらことは何を意味するものであろうか。このことを二つの面から考えてみよう。一つは、門流の独立化の傾向であり、他は、南朝帝権の強化である。

さて、私が嘗て明らかにしたように、門閥社会の動揺につれての門流独立化の傾向は、東晋末以来のことであった（「門閥社会の成立と崩壊」第四章（門閥社会史、所収））。その場合、己の門流の勢力、地位の保持が当面の急務となろう。その対策の一つとしてとられたのが、この通婚圏の拡大という手段ではなかったであろうか。例えば上述謝氏の場合、何れも門閥として軽視された傍系で、名門に属するとはいえ、政権からはほど遠い所にあった人々にとつては、自力で自家勢力の回復を計るより外に道はなかった筈であり、その場合、最も確実にして早い方法は、政治的実力者と結ぶということであったであろう。そこでは、どのような名門と通婚するかという「名」よりも、どのような実力者と結ぶかという「実」の方がとられた、といえよう。このことは、たとえ傍系ではなく、現在勢力を保っている名門主流であろうとも考えていたことであろう。例えば前引琅邪王氏と呉興沈氏、彭城劉氏と呉郡張氏の婚の如きはそうであろう。この考え方をもつとつめてゆけば、最高の政治的実力者、即ち王室と結ぶことによって一家の勢力を保つてゆこうと考えるのは当然である。

こう考えてくると、最早そこには江南出身とか、江北出身とかいうことは問われなくなるのは当然である。問われるのは、誰が実力者であるか、ということであろう。勿論、既に私が明らかにした如

く、東晋時代から北方出身者の南人化が行われつつあった、換言すれば、北方出身者も亦江南現住地に風土化しつつあったとすれば、更に又、南北人の社会的融和が早くからみられ（拙稿「東晋における南北人対立問題―その社会的考察―」（史学雑誌77―10）、同「東晋初頭政権の性格の一考察」（長崎大学文学部社会科学論叢第14号）等参照）、或は又、越智重明氏が主張されるように、南朝においては、「非貴族間の婚姻は南北人の間で普通一般に行われていた」（越智氏「南朝の貴族と豪族」（史淵第六十九輯））とするならば、江北出身者と江南出身者という区別は、実は社会的には、東晋から宋朝にかけて漸次無意味となりつつあったであろう。そこにもつてきて、門閥の動揺分裂による門流の独立が顕わになり、政治的地位が強化されねばならなくなれば、最早政治的にも江北系、江南系の別は問われなくなり、問われるのは、誰が実力者であり、一流貴族であるか、という事であろう。（拙稿「南朝における南北人問題―南朝の成立―」（長崎大学教育学部社会科学論叢第19号））

さて、通婚圏の拡大は、南朝帝権の強化とも関係があろう。南朝皇帝権力は基本的には中央貴族を支配し（越智氏前出「南朝における皇帝の中央貴族支配について」参照）、特に宋孝武帝以降、専制的傾向を著しくしたことは（拙稿「魏晋南朝における吏部権限の変遷の一考察」（門閥社会史所収））、既に学者の明らかにしたところである。このように門閥社会の動揺分裂と同時に、帝権の強化が見られると、元来寄生官僚たる門閥は権力に依存する外はないわけで、直接王室に通ずるとか、或は王室に近い権門、側近に通婚して一家の保全を計る度合を強くしたと思われる。その結果、寒門、寒人である権勢者との通婚が例外ではなくなってくる。すべてが、帝権を中心にして動く、という社会状態が生まれてくることになるろう。

最後に、陳朝の特異性について一言しておこう。前述のように、

王室の通婚は江北系名門が急激に減じ、江南豪族との通婚が多くなってくる。このことの意味を考える為には、陳政権の特質についてみる必要がある。宮崎博士の指摘によれば、「陳の領土は北より北斉の圧迫をうけて江北を失い、また北周に蜀を奪われ、加うるに梁の遺孽なる後梁の荊州に拠るあり、南朝四代のうちでは最小、最微力であった。国内においては、侯景の叛乱以後内戦がつづいた為に国土が荒廃し、世情は騒然として戦国的な形相を呈してきたので、その間に旧来の貴族の没落する者が相つぎ南朝そのものにとつても、また貴族制度にとつても、正しく重大な危機が到来したのであった。殊に地方における土豪勢力の擡頭は、中央における武將の専權と相まって、貴族政治に代る軍閥政治の出現すら予想せられた。」(宮崎氏「九官人法の研究」第一編十二)とされている。即ち、従来の貴族の没落と地方土豪の擡頭による、門閥社会の動揺がみられる。ということは、既に晋朝の門閥の動揺分裂によって、門流の独立化が行われていたのに加えて、内戦によるそれら門流の没落という二重の打撃が門閥社会に加えられたわけである。勿論、この武人擡頭の傾向は、陳朝に及んで急激に起つたわけではなく、宋朝以来のことであり、政治の実権は形式的な高位高官の者の手より、寧ろ天子周辺の寒門寒人の手にうつっていたこと、早く宮川氏が指摘されたところである(宮川尚志氏、「政治、社会篇」「六朝史研究第五章参照」)。とすれば、陳朝においては、そのような傾向がはつきりした姿を現わしてきたということであつて、名門と寒門、江北出身と江南出身という如き、旧来の門閥内で固められてきた区別は、最早意味をもたなくなつてきたといえるのではあるまいか。

## 結 び

以上述べてきたところを、もう少し整理してみよう。嘗てのべたように、魏、西晋以来各門閥によって作られた氏譜には、必ず婚姻の記事が記入されていた(拙稿「世説叙録の価値について」(史学雑誌 66-9))。このことは、通婚がこれらの家にとつて重大な事件であつたからに外ならぬ。どのような家と通婚するかは、その家の門閥社会内における地位を示すものであつた。ところが東晋中期以降、そのような氏譜的世界は動揺を始めてきた。ということは、同族の大同団結は弱まり、分派した門流の独立化が生じたことを意味する。すると、同一族の中に主流派、傍系の別が生じ、それらは各自権力と結ぶことによつて、自らの門流の繁栄を考えた。従つて通婚は、権力者の最たる王室、或は王室をめぐる実力者―それがどのような社会的地位をもつかは余り問われない―との間に行われ、そこに通婚圏の拡大が必至となってくる。

若し以上の如く考えて大過なしとすれば、通婚面からみた限りにおいては、門閥社会は東晋末から南朝にかけて、徐々に崩壊の途をたどりつゝあつたといつてよい、梁末陳初の内戦は単にその傾向を助長したものにすぎなかつたといえよう。